

研究展望(平成17年)

伊海, 孝充 / 山中, 玲子 / 表, きよし / 小林, 健二 / 高橋, 悠介 / 宮本, 圭造 / 橋本, 朝生 / 玉村, 恭

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of
Nogaku Studies

(巻 / Volume)

33

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2009-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007499>

研究展望（平成十七年）

今号も30号以来続けている共同執筆により、平成17年に発表された能・狂言関係の単行本および、雑誌等に掲載された論文を概観する。この年に発表された論文・小論、研究とも関わるエッセイ等のうち主な物を取りあげ、全体を、単行本（表きよし）、資料研究・資料紹介（小林健二）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（宮本圭造）、作品研究（伊海孝充・山中玲子）、狂言研究（橋本朝生）、外国語による能研究（玉村恭）の七つに分け、分担執筆している。前号同様、演出・技法研究は作品研究に含めている。また、現代の能役者による作品解釈や翻訳の問題等を扱う新しいスタイルの研究も、作品研究の最後に言及した。重要な論考を見落とすなどの遺漏も少なからずあると思う。ご寛恕を乞う。

単行本

『上方能楽史の研究』（宮本圭造著。A5判784頁。2月。和泉書院。一五〇〇〇円）

江戸時代を中心に、上方における能楽の様相を詳細に考察した書。「序章 手猿楽の発生と展開」で室町期の手猿楽の

活動を概観し、「第一章 江戸前期京都能楽界の動向」では紀伊藩お抱え役者の渋谷、禁裏の能で活躍した神松頼母や小島了達、観世座脇役者の進藤家などについて考察する。「第二章 南都欄宜衆の演能活動」では、奈良のみならず京都や大坂など広い範囲で活躍し、諸藩に召し抱えられた者も多かった南都欄宜衆の活動の様子を紹介している。「第三章 神事猿楽の動向」では紀伊・播磨・丹波の神事猿楽で活躍した能役者に焦点を当てる。「第四章 畿内諸藩の能楽」では紀伊徳川藩と宇陀松山藩の能楽への取り組みを論じている。また資料篇として「江戸前期の禁裏・仙洞能」「洛中洛外の勧進能」「紀伊藩お抱え役者の系譜」があり、様々な資料から関連する事柄を探し出すことにより実態が詳しく把握できるようにになっている。「付篇 近世芸能をめぐる諸問題」には女舞や古浄瑠璃、歌舞伎などの考察があり、著者の関心の広さが窺える。全体にわたって、資料を博搜して実態を解明していく圧倒的な迫力が感じられる書である。

『柳川藩十一万石立花家伝来能面装束展』（国立能楽堂調査養成課編集。B5判56頁。2月。日本芸術文化振興会）

2月から3月にかけて国立能楽堂で行なわれた展示の図録。九州柳川藩の旧藩主である立花家伝来の能面・能装束が紹介されており、御花史料館学芸課長の植野かおり氏による解説「旧柳川藩主立花家伝来の能楽資料」が掲載されている。柳川藩の能楽に関する資料はあまり多くは残されていないために具体的な様子を把握するのは困難だが、宝満神社の神事能や最後の藩主立花鑑寛の能楽愛好、藩お抱え能役者の様子などが資料に基づきながら考察されている。

『大和猿楽史参究』（表章著。A5判478頁。3月。岩波書店。一二〇〇〇円）

昭和49年から平成3年の間に本『能楽研究』などに発表した大和猿楽関係の論考を一冊にまとめたもの。Ⅰは「多武峰の猿楽」と「薪猿楽の変遷」で、大和猿楽四座が参勤義務を負っていた両寺社の猿楽の様子を考察する。Ⅱは「大和猿楽の「長」の性格の変遷」で、大和猿楽四座における「長」の役割やその変遷を辿ることにより、座の構成員が翁グループと演能グループに分けられることや、座が特定の神事猿楽で（式三番）を演じるための組織だったことなどを明らかにしている。Ⅲは「世阿弥以前」「観阿弥清次と結崎座」「大和猿楽四座の座名をめぐる」から成り、観阿弥創座説の否定など観阿弥の業績の再検討などがなされている。いずれの論考も資料に基づいた着実な考察を積み重ねることにより、従来の説を覆す新たな考え方が盛り込まれており、能楽史研究に大きな影響を与えた論考である。それらが一冊にまとめられた

ことで、大和猿楽をめぐる重要な問題を把握しやすくなったことは大変喜ばしい。

『能の背景』（中村格・田中成行・村田勇司・李珍鎬著。A5判316頁。3月。能楽出版社。三五〇〇円）

中村氏とその教え子の三氏とによる論文集。中村氏は「能の背景」「日本海の交通と文学」「弓八幡」と源氏嫡流説、村田氏は「小林」の周辺、「後北条氏と猿楽」「能に描かれる人身売買の虚構性」「狂言「磁石」の発想と享受」、田中氏は「融」の場、「定家と歓喜天（聖天）信仰」「船弁慶」を読み直す、李氏は「世阿弥の和歌撰取の理論と実際」「世阿弥の（女体の能）の和歌撰取考」の論考が掲載されている。また中村氏による鴻山文庫蔵『宗随本古型付』の翻刻・解説も収録されている。

21世紀COE国際日本学研究叢書1『外国人の能楽研究』（法政大学能楽研究所編集。A5判215頁。3月。法政大学国際日本学研究センター）

平成15年7、8月に本学博物館展示室で開催した能楽資料展「世界の中の能―外国人の能楽研究」の配布資料と、同年7月1・2・8・9・16日の5日間、ボアソナードタワー26階スカイホールで開かれた第8回法政大学能楽セミナー「能に注がれた外国人のまなざし」の講演記録とに基づいて編まれたもの。Ⅰ「能に注がれた外国人のまなざし」には、河村ハツエ「先駆者たちが見た能楽」、西野春雄「ベルツィンスキ―の能面研究」、モニカ・ペーテ「能翻訳の変化／この100

年」(「作品研究」の項で紹介)、渡邊守章「クロードと能」、観世栄夫「海外公演で感じたこと」を収め、Ⅱ「能楽関係外国語文献目録」は英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語・その他(ポルトガル・オランダ・デンマーク・ルーマニア・ロシア・中国・韓国・スリランカ・タイ)の言語による能楽関係文献を、簡単な内容紹介とともに収録している。

『能楽の中の女たち』(脇田晴子著。四六判256頁。5月。岩波書店。三〇四五円)

女性が登場する能11曲を取り上げ、それぞれの曲の特徴や登場する女性の思いなどを論じたもの。取り上げられている曲は(三輪・山姥・井筒・班女・砧・求塚・女郎花・百万・桜川・自然居士・卒都婆小町)。単にあらずじを紹介するのではなく、作品の背景となる事柄を織り交ぜながら平易な文章で書かれているため、能楽愛好者はもちろんのこと、能を見たことのない人にも能の面白さが伝わる内容になっている。

『黒川能の研究』(菅原浩二著。A5判277頁。5月。私家版)

黒川能研究に取り組んできた著者の手に成る書。「第一章 黒川能の歴史」で黒川能の歴史を概観し、「第二章 黒川能研究史」では大正期から昭和30年代、昭和40年代、昭和50年代、昭和60年代以降に区切って黒川能に関する著書・論文などを紹介する。「第三章 研究史をふりかえって」では第二章で取り上げた著書・論文に見られる説を、黒川能の淵源に

関して、黒川能の芸風について、伝統を支えてきたものという三つの視点から整理し直している。「第四章 芸能にみるその効果と存在意義について」では黒川能と田楽や羽黒修験などとの関係に触れながら黒川能の宗教性を考察する。「附章 王祇祭の次第」では二月の王祇祭までの準備や王祇祭の内容を紹介している。黒川能について今までどのような事が論じられてきたかを把握するには便利な本である。

『芸能史のなかの本願寺―能・狂言・茶の湯・花の文化史―』(籠谷眞智子著。A5判353頁。6月。自照社出版。七〇〇〇円)

本願寺の芸能について研究を重ねてきた著者による論考。

「第一部 本願寺の能・狂言」「第二部 真宗文化の発見」に分かれ、第一部はさらに六項目に分けられる。「一 蓮如時代の能・狂言」では、蓮如時代の寺院での演能の状況を概観し、蓮如が能・狂言を教化に活用した事を指摘、さらに小田原市の真楽寺に蓮如作として伝えられている能(国府津)を紹介する。「二 実如・証如時代の能・狂言」では、玄人の能役者の本願寺出入りの様子や、御堂衆・定衆・坊主衆といった寺内の演能者の活動、本願寺の能舞台の変遷などが論じられる。「三 証如時代寺内手猿衆の実態」では装束奉行・楽屋奉行といった寺内演能のための職制が整えられていく様子が、「四 本願寺の内衆下間氏と手能」では本願寺坊官である下間氏と能との関わりが述べられている。「五 石山本願寺の謡初と「翁」」では証如時代の石山本願寺における謡初

や「翁」上演の様子が取り上げられ、「六 坊官下間少進法印仲之の能道」では玄人以上の活躍をした下間少進の能への取り組みを、本願寺における少進の立場の変化を踏まえながら論じている。最後の「七 宗祖降誕会祝賀能成立の経緯」は明治時代になって恒例化した降誕会での能についての考察である。本願寺での多くの能の催しやそこでの様々な役者の活動は能楽史研究の上でも重要な問題であり、本書における本願寺の能の実態追究は、きわめて有意義である。

『世阿弥能楽論研究 初入門』（張新英著、表章校閲。B 6判292頁。6月。わんや書店。二一〇〇円）

中国からの長期にわたる留学生生活において能楽研究に取り組んだ著者が、博士論文に基づきながら世阿弥能楽論研究の手引きとしてまとめた書。「第一章 日本における戦後の世阿弥研究」では、大正期から今日までの世阿弥研究の歩みを時期を区切りながら紹介し、生誕年や幼名など世阿弥の経歴の中で問題となった事柄を考察する。「第二章 世阿弥の伝書」では金春大夫宛書状を含めて22種の世阿弥伝書について、その特色や問題点を一種ずつ丹念に取り上げていく。「第三章 世阿弥能楽論の諸相」では、稽古・習道論、序破急論、幽玄論に分けて、これらの事柄が世阿弥伝書それぞれにおいてどう論じられているかを追求している。能楽論研究に取り組み始めて徐々に進展させてきた著者の体験に基づく記述だけでなく、世阿弥の能楽論研究を志す人にとって格好の入門書であり、著者が世阿弥能楽論のどのような部分に関心を持っ

て研究を進めてきたかがよくわかる。

『狂言画写の世界―影印・作品解説・装束の着付・装束の構成―』（安東伸元・中野慎子著。B 5判一八二頁。7月。和泉書院。五〇〇〇円）

天保十五年（一八四四）山田考達なる人の手になる狂言絵画である茶梅庵文庫蔵『狂言画写』（卷子本。白描の影印を中心に、描かれた二十六曲について、安東氏による作品解説、登場する各役の装束の着付の連続写真を付す解説、中野氏による装束の形態、裁ち方・縫い方にまで及ぶ構成技法の解説を加える。〈見物左衛門〉などを収め、和泉流の舞台を描いたものだが、〈清水座頭〉に座頭と替女の仲裁をするらしい男が描かれるのが不審。

『岡山藩主池田綱政と「能」―元禄期の大名の生活と能―』（西脇藍著。A 5判292頁。8月。吉備人出版。三一五〇円）

江戸時代を通じて能楽に熱心だった岡山藩の藩主の中でも、特に能に熱中した四代池田綱政に焦点を当て、岡山藩の能への取り組みを追求している。岡山藩の日記『日次記』を始めとして、様々な藩政資料を駆使しての意欲的な論考になっている。序章で研究方法を明示し、「第一章 『日次記』にみる池田綱政の「能」では謡初や御能初といった池田家における能関係行事を紹介し、綱政の演能を祝儀、招請、御養生・御慰、稽古の四つに分けてそれぞれの特徴を明らかにする。第二章から第四章の「江戸屋敷と国元における「能」では

第Ⅰ期(延宝九年〜元禄九年)、第Ⅱ期(元禄十年〜宝永三年)、第Ⅲ期(宝永四年〜正徳四年)に分けて綱政と能との関わりを考察する。江戸の藩邸で盛んに能の催しを行った第Ⅰ期から第Ⅱ期、岡山の御後園に新築された舞台での催しを多くの人に見物させた第Ⅲ期など、それぞれに興味深い取り組みが行なわれている。「第五章 結び」で全体がしつかりとまとめられているが、將軍徳川綱吉の能楽愛好の影響で江戸時代の中でも最も能が盛んだった時期に、諸藩の大名にも影響を与えた池田家の能の様子が詳細に把握できる書である。

『あらずじで読む 名作狂言50』(小林貢・監修、森田拾史郎・写真。A5判144頁。8月。世界文化社。一八〇〇円)

題名通り50番の狂言作品を紹介する。あらずじだけでなく、笑いのポイントやその作品の特色も紹介されている。狂言の歴史や新作狂言、間狂言など狂言と関わる様々な事柄も、短いながら要を得た文章で説明されている。

『世阿弥ヒューマニズムの開眼から断絶まで』(太田光一著。四六判288頁。8月。郁朋社。一八九〇円)

近年の研究成果を踏まえながらも大胆な推測を加え、世阿弥の生涯を再検討する。世阿弥作品の分析を通して世阿弥には人間の尊厳を守ろうとするヒューマニズムがあるとし、息男元雅の死によって、それが受け継がれないまま断絶したとする。

『大鼓役者の家と芸―金沢・飯島家十代の歴史―』(長山直治・西村聡編著。A5判368頁。10月。飯嶋調寿会。三五七〇円)

円)

江戸時代に加賀藩の大鼓方町役者として活躍し、明治以後も金沢を拠点に活動を持ってきた飯島家の資料を紹介しながらその歴史を辿る。主に近世部分は長山氏、近代部分は西村氏が担当している。冒頭に「概説 大鼓飯島家の三百年」があり、「第一章 飯島家の文書」では飯島家伝来の文書を中心に加賀藩関係資料をも含めて年代を追って翻刻・紹介し、それらの資料から窺える近世の飯島家の様子が考察されている。「第二章 近代飯島家の歩みと記録」は明治以後の雑誌・新聞の記事やパンフレットに掲載された文章など様々な飯島家関係の資料を紹介し、近代の飯島家の様子が考察されている。「第三章 近世における出演能・囃子番組」と「第四章 近代における出演能・囃子番組」は各時代における飯島家の歴代が出演した催しの番組を集成したもので、章ごとに考察が加えられている。一つの家の活動がこれだけ多くの資料に基づいて明らかにされていること自体が大きな驚きであり、金沢という江戸時代の地方都市の中ではきわめて能が盛んだった土地での町役者の活動の実態を知る上でも貴重な本である。

『近藤乾之助 謡う心・舞う心』(藤原摩彌子著。A5判344頁。10月。集英社。四七二五円)

近藤乾之助氏の舞台に大きな衝撃を受けた著者が、四年にわたる取材をもとにまとめた芸談。第一章では乾之助氏の生い立ちと多くの人との出会いについて、第二章では能の作品

それぞれへの思いが記されている。この第二章では脇能21番、修羅能15番、鬘能33番、四番目物76番、切能36番、計181番が取り上げられている点に特色が見られる。

『狂言鑑賞二百一番』（金子直樹・文、吉越研・写真。A5判264頁。11月。淡交社。二一〇〇円）

序で狂言鑑賞の基礎知識を紹介した後、福神狂言・御百姓狂言・大名狂言といった作品分類に従って狂言の作品を紹介していく。あらずじだけでなく「鑑賞」としてそれぞれの作品の特色や見どころを紹介するので、作品の様子が理解しやすい。収録された曲数が多く、替間狂言・番外狂言・復曲狂言・新作狂言まで取り上げられている点が親切である。

論文

【資料研究・資料紹介】

この年の資料研究としてまず取り上げるべきは、『国文学解釈と教材の研究』（7月）の「能―歴史と身体」という特集において、『観世文庫解題』と題して観世文庫の調査研究報告がなされたことである。これは二〇〇三年八月から松岡心平氏を中心に行われていた共同研究成果の中間報告であり、まず松岡氏のプロジェクトに関する概説があつて、その後に個別報告が三本載る。小川剛生「江戸前期―演能の記録を中心に」は、二条康道編承応二年（一六五三）『猿楽故実』の考証で、大染金剛院記、浄明珠院記の記事を紹介し、その資料

的意義について述べたもの。落合博志「観世元章―明和改正謡本の稿本など」は、観世文庫内の元章関係資料を概観して、明和改正謡本の稿本と見られる謡本「爐雪集」「江爐點雪集」など四点の資料について書き入りを詳しく分析し、明和改正謡本の第一次稿本と位置づけたものである。磯田道史「明治維新期」は、「親類書」「清孝履歴」「鉄之丞石橋上演に付、徳川家家令書状」により明治初年頃の観世家やその周辺の能楽諸家の様相を浮き彫りにした。三者とも手堅い資料考証となっている。観世文庫の資料は三千点にも上るとされるが、右の報告からも今後の研究成果が期待される。

中司由起子「寛永五年金春大夫重勝勸進能図」（『能と狂言』3。6月）は、金春信高氏所蔵の資料の紹介。この勸進能の番組は「江戸初期能組控」に所収されていることから知られてはいたが、その舞台や桟敷が描き込まれた史料として貴重である。中央に舞台、上部に楽屋などの建造物、下部に桟敷が描かれており、桟敷には四十五名の大名が記されている。警護の小屋や道具まで描き込まれており、江戸初期に興行された勸進能の場を具体的に知ることが出来る好資料である。

ワキ方の資料が二点翻刻された。飯塚恵理人「豊嶋十郎筆『高安流仕舞附 天』（二）」（『名古屋芸文化』15。12月）は同誌14号の（一）に続く豊嶋十郎筆のワキ方型付「高安流仕舞附 天」の翻刻。文政十一年高安知実が書写したものを昭和六年に豊嶋十郎が転写したもので、『自然居士』より（張良）ま

で二十五番が翻刻される。原本は焼失したと伝えられているので新写本とは言えども貴重であろう。次号以下に地・人と続くとのこと。もう一つも同氏による「〔翻刻〕新城川村類造手沢本『高安流脇世理賦附坤』」(『楳山国文学』29。3月)で、同誌28号所載の新城の川村家に所蔵される高安流ワキ方川村類造氏手沢の『高安流脇世理賦附』の乾の巻に続く翻刻である。川村師の師匠鈴木九平が明治十五年に書写したもので、新城の祭礼能の折に実際に用いられた本である。両方とも翻刻資料の少ないワキ方高安流の資料だけに有難いが、ただの翻刻紹介に終わるのではなく、これらがワキ方の演能史の上でどのような意味を持ち、今後の研究に有用であるかなど、その意義についての論考が欲しいところである。なお、これらの資料は飯塚氏のHPにもデータ・ベースとして載せられており、閲覧することが可能であることを付言しておく。

伊海孝充「楠川文庫蔵書目録(付解題)」(『能楽研究』29。5月)は金剛流から観世流へ転流した大正・昭和初期の能役者、楠川正範氏旧蔵資料の解題付き目録。金剛流の謡本・演出資料が大半を占めるが、伊達吉村が書写した謡本など仙台藩旧蔵の貴重資料も含むことを報告する。

【能楽論研究】

まず、『花伝』についての論文から紹介する。岩崎雅彦「無所住と寿福増長―『花伝』語彙考証、二題―」(『鎮仙』534。5月)は、『花伝』第七別紙口伝の「能も住する所なきを、先

づ花と知るべし」の背景にある『金剛経』の「応無所住而生其心」の句(六祖壇経)によって特に有名になった句や、奥義篇の「寿福増長」という言葉について、同時代の将軍を中心とする文化圏の中での用例を挙げて考証したもの。前者は春屋妙葩の一行書にもみえ、後者は住心院実意の『熊野詣日記』で現世利益の意味で使われていることを指摘する。

「寿福増長」については、石黒吉次郎「能楽論―『風姿花伝』など」(『国文学解釈と鑑賞』12月)でも、「福寿増長」という形も含め『空華日用工夫略集』や『大乘院寺社雜事記』の用例が指摘され、もともとは寺院から出た言葉と想定されている。また、同論文では、世阿弥のいう「文字に当たる風情」の手段が能の歌舞劇化において果たした役割を論じるほか、『風姿花伝』の「風姿」の語が、歌論において歌の優雅な姿の意で使われていた「風姿」を撰取したものである可能性を指摘する。その他、天野文雄「世阿弥の「家名」を再考する」(『おもて』84)は、奥義篇をはじめ、『遊楽習道風見』『夢跡一紙』『却来華』にみえる言葉「かめい」「家名」は、いずれも「佳名」の方がよく意味が通り、能(八島)にも「佳名」で解釈すべき用例があることから、本来「佳名」である可能性を論じる。

『花伝』以外の世阿弥能楽論研究としては、玉村恭「世阿弥の能楽論における「無」の源泉―音曲論の果たした役割をめぐって」(『美学』56。6月)が挙げられる。『拾玉得花』や『遊楽習道風見』における有無の対立を止揚した高次の

「無」の源泉として、『音曲口伝』から『曲付次第』を経て『風曲集』へと至る音曲論、特に「無文音感」説の果たした役割を論じたものである。

禅竹能楽論については、『ZEMMI—中世の芸術と文化』3号(10月)が禅竹特集を組んだことにより多くの論文が出ている。この特集には、高橋悠介とポール・アトキンス(竹内晶子訳)による、日本と英語圏における禅竹研究の展望と論文リストも付いており、禅竹研究の際に活用していただけたら幸いである。便宜上、能楽論研究以外にも含め、以下に同誌所載の論文を紹介する。

竹内晶子「禅竹と比喻—「熊野」を手がかりに」は、一曲を通じて繰り返し現れる比喻の意味を担った言葉「反復語」として、『熊野』における「花」の比喻を詳しく分析するほか、『定家の「雨」、賀茂の「水」、龍田の「紅葉」について比喻の様相を検討する。反復語に付される比喻の意味が、世阿弥作品においては一曲を通じて一貫していることが多いのに対し、禅竹作品では多義性が認められ、それは「多の中に一を見る」禅竹能楽論の思考回路とも通底しているとする。

松岡心平「源氏物語を読む金春禅竹」は、禅竹が『歌舞髓脳記』などにおいて、光源氏が舞った青海波(源氏物語「紅葉賀巻」)の歌舞の位を理想的としていることに注目し、それは六輪一露説と同じく、潜在的な力の領域がこの世に現れ出てくることに對する禅竹のこだわりとみる。また、『楊貴妃』(小督)における『源氏物語』享受のあり方と工夫を分析し、

禅竹は梗概書だけでなく『源氏物語』本文をしつかり読みこなしした上で能を作っていたとする。松岡智之「禅竹伝書と山王神道—『明宿集』を起点に」は、『明宿集』にみえる山王権現と三輪明神の一体説や、六輪一露説での「三輪清浄」について、山王神道説の影響を考証したもので、『明宿集』における翁一体説のネットワークを考える上でも興味深い論文となっている。金賢旭「住吉明神と金春禅竹の『明宿集』」は、住吉明神の示現のあり方について塩土老翁や人麿などとの関連を考察した上で、『明宿集』における住吉明神と翁の一体説の背景として、住吉明神が早くに翁の形象をとる神とされたことと共に、多様な現れ方をする神であったことを挙げる。高橋悠介「円満井座の舍利と禅竹」は、秦河勝伝来とされる円満井座の舍利の由来譚は、河内の律宗寺院・教興寺の舍利をめぐる言説の影響を受けたものと想定した。また、禅竹が、舍利と日本の神の一体説の思想的根拠として流通していた句を引き、舍利と翁を一体視していたことを明らかにして、『明宿集』を読み直してみた。

『ZEMMI』掲載以外の禅竹研究では、高橋悠介「金春禅竹の引く『覚大師云』の句について—六輪一露説と一心三観」(『能と狂言』3)がある。禅竹が『稻荷山参籠記』の前に書き付けている円仁仮託の句の引用背景を考察すると共に、六輪一露説の展開の中に見られる一心三観をめぐる要素が、六輪と観という形態と密接に関連していることを論じたものである。また、金賢旭「翁信仰と渡来文化」(『国文学解釈と

教材の研究」(7月)は、翁の姿をとる神の中には八幡神・稲荷明神・新羅明神・赤山明神など秦氏の信仰や渡来文化と関わる神が多いことから、翁信仰を渡来文化の影響という視点から考えるもので、『明宿集』の鬼面・翁面一体説に絡めて、『寺門伝記補録』に新羅明神が怒鬼から老翁に変じたという記事があることなども紹介している。

金春禪鳳については、伊海孝充「金春禪鳳の芸能といけばな―「花が能にちかく候」「花のしほつけ」考」(『能と狂言』3)がある。禪鳳が「花が能にちかく候」という背景として、いけばななどの花の伝書と禪鳳能楽論の共通性を検討し、当座で自由に表現する時の風情や自然体の美しさを重視する点に注目する。また、『禪鳳雑談』にみえる「花のしほつけ」「花のしほひし」を塩を用いた養花法と解釈した上で、禪鳳が花を引き合いにしながら、能でも外見だけを華美に繕うのは良くないと論じる文脈を明らかにしている。

【能楽史研究】

江戸時代の能楽史に関する研究が多いのが近年の傾向であったが、この年は鎌倉・南北朝期の、比較的古いところを扱った論考がまとまって出たのをはじめ、『梅若実日記』の刊行の影響で、近代能楽史に関する論考が比較的多く見られるなど、新たな傾向も見られた。前者はともかく、近代の能楽を取り上げた論文は今後も引き続き数多く発表されることが予想され、能楽史の領域はこの十年で大きく拡大していく

ものと思われる。この年はまた、江戸時代の諸藩における能面製作・管理の実態を取り上げた論考もまとまって出た。美術史としての能面研究ではなく、近世能楽史の枠組みの中で能面史を新たに捉え直す試みも、近年の一つの傾向といえよう。

まずは、古い時代を取り上げたものから。沖本幸子「滝口と芸能」(『能と狂言』3)は、宮中警護にあたる滝口と芸能との関わりを論じたもので、残された僅かな資料を丁寧に読み解いて、滝口の間籍が芸能化し、やがて彼らが芸能者の存在へと展開していった過程を明らかにする。寺院延年の場に参加した「本所者」と滝口との関係など、なおはっきりしない点も残るが、十二世紀後半から十三世紀にかけての「侍猿楽」を滝口の芸能の延長に位置付けるなど、重要な指摘が多い。

天野文雄「鎌倉末期の田楽界と相模入道高時」(『芸能史研究』168。1月)は、東大寺文書中の田楽に関する新資料の紹介。手掻会の田楽座入座をめぐって、北条高時が介入したことを示す資料で、高時の田楽愛好や当時の田楽座の実態が具体的に窺える点が貴重である。鎌倉末期と南北朝期の田楽と権力者との関係にも論が及び、当時の能界が田楽庄倒優位の状況にあったことを確認する。その田楽の役者である増阿弥の事跡を取り上げたのが、重田みち「増阿弥全盛期」(『鎭仙』532。3月)。「山科家礼記」に見える応永十九年四月・八月の常在光院での義持臨席の田楽興行について、増阿弥によ

る演能の可能性を指摘し、これが義持の増阿弥最良の契機ではなかったかとする。また、小川剛生「良基と世阿弥」(『Z E A M I』3。10月)は、副題に「良基消息詞」偽作説をめぐって」とあるように、百瀬今朝雄氏の『自二条殿被遣尊勝院御消息詞』偽作説に対する反論。百瀬氏が不自然とされた語の用法について、その指摘が妥当でないことを一つ一つ論証し、良基の文章との共通性を指摘した上で、本消息が仮名文の作品として公開を前提に書かれたものであったろうとする。その主張は何れも説得力があり、随所に世阿弥の幼年期を考える上で重要な指摘も見られる。なお、本消息の文学作品の側面については、前年に発表された岩崎雅彦「老連歌師と稚児―二条良基書状の文学的構造―」(『鎮仙』525。6月)にも指摘がある。

室町後期の能楽史についての論考は、田口和夫「寛正五年紀河原勧進猿楽追考(一)」(文科大学「文学部紀要」19―1。9月)、小森崇弘「後土御門天皇期の禁裏における猿楽興行の諸様相」(『芸能史研究』169。4月)の二本が管見に入った。田口稿は、音阿弥・観世正盛による寛正五年紀河原勧進猿楽で勧進聖をつとめた鞍馬寺の僧についての考証。従来、事跡が不分明で、名前も記録によって「春松院」「青松院」「善盛」「春盛」と揺れが見られたが、田口氏は横川景三「補庵京華外集」に「春松院春盛老人像賛」が見えることを紹介して、春松院春盛が正しいことを指摘、またその特異な経歴についても明らかにする。小森稿は、歴史学の立場から、後土

御門天皇期の禁裏御所での猿楽興行の在り方を分析したもので、同時期の猿楽が「内々」「外様」「御所御所」「女房」など、公家社会の集団ごとの申沙汰によって行なわれていることに着目、こうした申沙汰の猿楽は、応仁の乱によって衰退した朝儀に代わって、天皇と公家との君臣関係を確認する儀礼の場としての役割を担っていたとする。従来の能楽史研究では見落とされがちだった猿楽興行の一面を浮かび上げさせた好論で、今後の展開が期待される場所であったが、惜しむべきことに氏は昨年若くして急逝された。

この他、古代から中世にいたる能の歴史を見渡し、かつ能の地方伝播を問題とした論に山路興造「芸能史における猿楽能」(『能と狂言』3)がある。物真似を本質とする猿楽芸が、翁猿楽という新たな形態の芸能を創出し、その後地方に伝播して各地独自の能の形態を生み出していった過程を巨視的に見る。従来は民俗芸能として捉えられることの多い山伏神楽についても、能楽史の枠組みの中で捉え直すことが必要であるとする提言は重要であろう。

続いて、近世能楽史関係。この年は江戸幕府の五座の能についての論文は少なく、地方の能楽史を取り上げたものが目立った。池田英悟「延宝五年の大坂勧進能」(武蔵野大学『能楽資料センター紀要』16。3月)、山川暁「大倉七左衛門家蔵「能囃子組」にみる尾張徳川家の演能」(『尾陽』2。4月)は、それぞれ大坂・尾張藩の能の様相を番組から考察した論考。池田稿は、延宝五年、大蔵庄左衛門によって催され

た大坂勸進能の番組構成と出演役者の顔ぶれから、その特徴を探ったもの。山川稿は、大倉家蔵『能囃子組』をもとに、六代藩主継友の代における尾張藩の演能のあり方を子細に検討し、前代に比して藩主自演の稽古能が影を潜め、身内の慰み能が増加していく傾向にあるとする。山川氏には、他に「新出の古沢厳島神社所蔵能装束と高野山下の神事能」(『京都国立博物館学叢』27。5月)もあり、紀伊高野山麓の古沢厳島神社所蔵の能装束を桃山期以前の貴重な事例として紹介して、同社で行なわれていた神事能との関連に論及する。

この他、鈴木正人「政宗と能楽」(『駒沢史学』65。7月)、表章「観世織部清尚三男の宝生大夫友勝」(『鍔仙』533。4月)、野崎典子「元和年中の女能」(『東海能楽研究会十周年記念論集』。5月)があり、鈴木稿は曲直瀬玄朔宛の新出の政宗書状を紹介して、政宗主催の能興行における政治的意図を考察。表稿は生年や経歴などに不明な点の多い宝生大夫友勝の事蹟を考証し、観世家から宝生家に養子入りの経緯や、その当時の年齢について、落合博志氏蔵『宝生流能伝書』などをもとに新見を呈示する。野崎稿は女能を取り上げた数少ない論考で、江戸初期に流行した女能の上演において、(海士)や(山姥)がしばしば脇能として演じられていることに着目、その背景を探っているが、中間報告的な内容にとどまっているのが残念である。

また、近世における能の周辺芸能への影響を論じたものに、近藤美織「歌舞伎における今様と能・狂言」(『演劇研究セン

ター紀要』5。1月)がある。歌舞伎の顔見世狂言・曾我狂言に見える「今様」の所作事と能・狂言との関係を考察したもので、板谷徹氏らによる先行研究を踏まえ、「今様」の所作事が多く上演された明和期の歌舞伎の作品を取り上げ、番付・評判記などをもとに、能・狂言の趣向取りの実際を具体的に明らかにする。その調査自体は手堅いものであるが、能取り物の所作事が「今様」と呼ばれた背景、その歌舞伎史における歴史的意義など、より大きな視点からの言及がもう少しほしいところ。

続いて、近代能楽史関係。小林責「青山大宮御所御能御用係顛末」(『能楽資料センター紀要』16)、三浦裕子「初代梅若実と一六稽古」(『能と狂言』3)は、ともに『梅若実日記』という第一次資料の刊行を受けての成果である。小林稿は英照皇太后の内意によって設けられた青山大宮御所御能御用係について、『梅若実日記』をもとに、その実態を詳細に跡付けたもの。従来明確でなかった御能御用係の人数やその構成員の変遷過程を明らかにし、御能御用係への下賜金のその後の行方まで言及する。三浦稿は、初代梅若実が催した稽古会である一六稽古について、『梅若実日記』に見える関連記事を丹念に調査し、二十年にわたる一六稽古を七期に分類して、それぞれの時期の稽古の特徴を整理するとともに、その意義を探ったもの。梅若実の手記では一六稽古の始期を明治十七年とするが、実際には明治十八年の開始であることを『梅若実日記』により確認する。

近代の能楽史を取り上げた論考には、他に伊藤真紀「デュポン嬢の能」(『文芸研究』95。3月)、飯塚恵理人「数寄者の時代」(『東海能楽研究会十周年記念論集』)もある。伊藤稿は、大正期に來日して金剛謹之輔のもとで稽古を積み、一九一九年にはニューヨークで能をモチーフにしたダンス公演を行なったデュポンの事蹟を、新聞や雑誌記事をもとに明らかにした論で、女性演能史・近代舞踏史とも関わる興味深い内容。飯塚稿は、尾張藩の御用商人の末裔で、維新後も豪商としての地位を保った関戸守彦と能との関わりをまとめたもので、宝生流の大野藤五郎、古春増五郎に就いて能の稽古を行なっていたこと、他の富商とともに呉服町能楽俱樂部を組織して、名古屋における演能の後援者としての役割を果たしたこと、関戸家蔵の能道具が守彦没後に売り立てられたこと、明治期の新聞記事などに基づいて記す。近代の能のパトロンとしての関戸家の姿に焦点を当てた最初の論考である点は貴重だが、肝腎の関戸守彦自身の演能活動についての言及は少ない。

続いて、能面史に関する論考も便宜上ここで取り上げる。まず、米田真理「健忘斎の能面鑑定をめぐる一考察」(『東海能楽研究会十周年記念論集』)。彦根藩が福山藩阿部家旧蔵面を購入する際に、喜多古能らとの間で交わされた能面鑑定に関する書状(彦根城博物館蔵)を紹介して、古能の古面鑑定に在り方を論じた好論。『仮面譜』の著者である喜多古能がどのようにに能面の目利きを行なっていたのか、その實際が窺え

る。同誌所収の保田紹雲「因州藩旧蔵能面に関する考察」は、氏が以前からまとめている鳥取池田藩旧蔵面についての考察の続編。前稿の誤謬を改め、また資料を追加して、池田吉泰による能面収集の経緯、面裏の銘文から窺える写しの多様性、他藩所蔵面との関係などについて多角的に論じる。全体の構成がやや未整理で、論旨が明確でないところが散見するが、膨大な面のデータを収集して鳥取池田藩旧蔵面を一覧化した表は労作。保田氏は同年に本稿の補論である「補遺・因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察」(『名古屋芸文文化』15)を続いて発表、新たにデータを追加して更なる追考を試みているが、前稿と内容の重複する点も多い。

【作品研究】

本年は久しぶりに、『国文学 解釈と教材の研究』7月号で「能―歴史と身体」と題する能の特集が組まれたので、まずはそこに掲載の論から紹介する(以下に掲げるほかに、他項で言及している論考もある)。谷知子「夢幻能と中世和歌―「人待つ女」の造型」は和歌の本歌取手法から夢幻能の形成を考える。「鶉」「砧」を詠む和歌を例に、後日談的解釈をした本歌取詠が、結ばれない恋の悲劇的展開を描いていることを指摘し、過去の物語を解釈する際に、待つ女の悲劇を強く意識させている点が夢幻能(特に「井筒」と類似する)という。定説を見ない夢幻能の生成過程に新視点を提供している。竹本幹夫「(丹後物狂)の形成」は(丹後物狂)の改作過程と世

阿弥の物狂能論の変遷を考察する。〈笛物狂〉(現存詞章は改作を経ている)とほぼ同内容であった井阿弥作(丹後物狂)は世阿弥によつて歌舞的要素が濃いシテ中心の能へと改作されたとする。また世阿弥伝書の記述をもとに、狂乱の演技から芸能性の重視へと世阿弥が意図する物狂能の性格が変化したことを指摘する。末尾には世阿弥後の展開にも言及されており、「物狂能史」的な内容となっている。土屋恵一郎「多田富雄の歌と能」新作能「無明の井」「望恨歌」は「無明の井」の考察を中心とした多田富雄論ともいふべきもの。「無明の井」は脳死という現在社会が抱える問題をテーマにしているが、「万葉集」に「本説」を求め、〈檜垣〉の詞章を転用することにより、能の歴史と深く繋がり、その詞章は「重層的な記憶の場所」で安定した世界を表現していると述べる。さらに、その手法は「本説」を再構成し、普遍的な意味の生成を具現化した禅竹と類似すると考える。天野文雄「能の復活上演の実際と課題―私の「復曲」参画体験から」は復曲の過程と問題点の紹介。詞章を改変するかどうか、演出の古形のこだわりに演者と研究者の立場が分かれること、演式の復元の意義、観客への対応などを説明する。そのほか、「対談」小林康夫・松岡心平「世阿弥の身と心と体―存在と時間」、大倉源次郎「能楽囃子の成立の体験的一考察」、観世清和「箱崎―天女の舞について」、村上湛「能の身体・さまざまな身体―古典劇批判の立場から」を含む。

「観世」では〈弱法師〉(安宅)〈碇潜〉の特集が組まれた。小

林健二「作品研究(弱法師)」(1月)は先行研究の中で指摘されているクナラ太子譚の影響を再検討し、『三国伝記』に〈弱法師〉の「サシ」に類似した文句がみえることを根拠に、中世の唱導説話の中に流布した同譚に拠つて作能された可能性を指摘する。具体的な典拠は特定しにくいだろうが、〈弱法師〉とクナラ太子説話との交流をより鮮明にする論考である。増田欣「作品研究「安宅」―弁慶の伴打」(5月)は〈安宅〉の素材を追究する。弁慶が義経を打撃する話は中世文芸の様々な作品で話柄が異なるが、中国の故事に類話が散見されるとし、特に『寒檠瑣綴』にみえる曇永の話が最も近いと位置づける。中国故事とは確かに類似するところもあるが、その故事がどのように受容されていたのかを考えると、〈安宅〉との関係は単純ではないだろう。中司由起子「〈安宅〉の作者について」(6月)は、表章氏の非信光作説や、宮増説を示唆する先行研究を紹介し、再検討する。さらに『舞芸六輪次第』に〈安宅〉が掲載されている点から、群小猿楽の周辺で作られた可能性も示す。先行研究の紹介が中心になっているので、中司氏自身のもう一步踏みこんだ考察を提示してほしかった。表きよし「作品研究(碇潜)」(10月)は〈碇潜〉の変遷過程を追う。江戸時代、網吉・家宣時代に復曲された碇潜は、江戸後期に金剛流では初めて演目に加えられ、金春では別家の大藏大夫で演じられ、観世では元章が改訂を加え明和本に所収したといった江戸時代の様相を示す。この過程で大人数の登場人物を省略する形が誕生したが、その形は江

戸後期にはすでに存在し、この時代に最も多く演じた大蔵大
夫がその改変に關与したと推測する。〈碇漕〉のような多焦点
の曲がどのように現在の演じ方に適応していったのかは、能
の歴史を考える上でも重要な視点であると思われる。

また、特集ではないが、『文学』にはこの年、世阿弥の能
の研究が三本掲載されたので、まとめて触れる。大谷節子
「中世古今注と能—相生の秘義—」(6—3。5月)は中世古
今注を用いた〈高砂〉の構想論。世阿弥が脇能の祝言性を重視
したことから、古今序注をもとに作能したことの関係性を指摘
した上、伊勢古注では業平と住吉明神との贈答と考えられて
いた和歌に対する古今注の言説をもとに、住吉明神から業平
を介して延喜帝に伝えられたとされる和歌政道一体の理念が、
〈高砂〉の構想にあつたと読む。古注を精査された考察で、従
うべき見解が多い。三宅晶子「舞を生む歌語—能における和
歌の力—」(6—4。7月)は終曲部に引かれている和歌の機能
を考察する。「上ノ詠」「中ノリ地」の小段構成をもつ〈鶴〉
〈松浦〉は、「上ノ詠」の和歌の縁語が「中ノリ地」で効果的
に用いられているため、動作語がその縁語の流れの中に組み
込まれ、その箇所演技が単なる所作ではなく、ひとかたまり
の美しい「舞」として構成されると指摘する。さらに「ワ
カ」「ノリ地」「哥」の構成をもつ〈松風〉などの「ワカ」も、
単なる序歌としてではなく、謡舞を引き立てる物語世界を描
出するため、機能しているとする。終曲部の引用和歌と
「舞」・謡舞との密接度は曲により濃淡があるように思えるが、

〈鶴〉の詞章の分析は世阿弥の作詞の完成度の高さを具体的に
示している。山中玲子「〈井筒〉への道」(6—5。9月)は女
体夢幻能として特異な位置にある〈井筒〉の考察。救いを求め
生前演じた舞を見せる幽霊能の系譜と、秘伝の開示や歌物語
の再現を中心とする世阿弥自筆本(雲林院)や(錦木)の系譜の
交差するところに〈井筒〉を位置づけ、執心を語るのはなく
「筒井筒の物語」を一人で再現することで、男女の性別の揺
らぎや昔と今の交錯を描くことができたとする。〈井筒〉の新
しい分析であると同時に、夢幻能の生成・展開を考える上で
の問題提起にもなっている。

以下、個別の論考を紹介していくが、例年にくらべて室町
末期の作品を扱う論が少なく、世阿弥時代やその周辺の作品
を扱う論が多かったようだ。田口和夫「〈自然居士〉研究拾遺
二題—「無而忽有」・「大法」—」(文教大学『文学部紀要』
18—2。3月)は氏の〈自然居士〉論の続考。「御伝鈔演義初
編」の記事を援用し、「天狗草紙」に見える難解語「無而忽
有」を「何もないところから忽然として出生する」と解し、
自然居士は本来「自然と化生した居士」という意であつたと
する。また人商人との問答の中の「大法」は、単なる方便で
はなく天台系の戒と密接な関わりがあることを指摘する。短
い論考ながら、他にも現行演出の矛盾点や〈花月〉の詞章分析
など示唆に富む内容である。

他ジャンルの芸能や当時の文化状況等の中に作品を置いて
考えようとする論考も増えている。原田香織「謡曲における

雅楽引用の機構——世阿弥能と『教訓抄』——(『東洋学研究』42。3月)は世阿弥の協能に引用されている雅楽関連用語の検討。『教訓抄』の言説を援用しながら、世阿弥の「祝言能」に引用されている神楽・神神楽・舞楽といった言葉が王朝文化のもつ美的世界と響きあいつつ、そのイメージを喚起する効果があるとされる。また、世阿弥が目指した幽玄美が王朝世界の美意識と深く結びついていたこと、当時の権力基盤である足利政権の貴族文化志向が雅楽引用と深く結びついていることを指摘する。祝言を基調とする曲と雅楽用語が調和するのは確かであろうが、原田氏が強調するように、雅楽の「引用」が「みやびな場」「聖なる世」を呼び起こすほどの効果があるかは、曲ごとの雅楽用語の重要性、その他の詞章や演技との関係などをさらに検討したうえで考える必要があるだろう。小川佳世子「能(融)と応永の詩画軸——『柴門新月図』をめぐる——」(『日本伝統音楽研究』2。3月)は「柴門新月図」等の詩画軸の表す世界を参考に、(融)の詞章のうち意味が確定できない「しもん」「こしう」をそれぞれ「柴門」「孤舟」とし、『柴門新月図』と能(融)に、懐旧の情や現前しない景色への憧れなど、共通のテーマが見られるとする。『柴門』『孤舟』の可能性は小川氏が整理しているとおり既に注釈等でも触れられており、それで良いのではないかとする小川稿には特に新しい根拠はない。「柴門」を「しもん」と読んだ例は相変わらず見つからず、「こしう」を「孤舟」と解した場合、当該のワキの台詞をどう解釈するかも示されて

いない。茅屋のイメージとの関わりも、肝腎の『音曲口伝』引用部分に「しもん」の部分が無いので何とも言えないだろう。非常に広い意味で世阿弥の禅的教養の一つとして応永の詩画軸が描く世界を考えるのは妥当と思われるが、個々の作品と結びつけるには、さらに多方面からの検討が必要だろう。石黒吉次郎「能『須磨源氏』における兜率天」(『伝承』1。6月)は(須磨源氏)において、後シテが兜率天に転生することの意義を考察する。浄土信仰と同様に盛んであった兜率天(弥勒)信仰が、貴族たちの美的な観想の世界と繋がっていたこと、文芸世界では極楽へ往生するためのステップとして兜率天があったことをもとに、光源氏が弥勒的な存在として描かれたことを説明する。光源氏に弥勒菩薩を重ねる解釈は謡曲世界だけのものではあったのだろうか。他の文芸についても知りたいところである。横山紘一「能「貞任」にみる能作者世阿弥の一断面」(『岩手大学大学院人文社会科学科学研究科研究紀要』14。5月)は(貞任)の成立背景に関する考察。論文のタイトルに「世阿弥」と明記されているので、ここで触れる従来、十分な本説研究がされてこなかった(貞任)と、足利政権の歴史観を色濃く反映する『梅松論』『源威集』との共通性を指摘し、義満の意向を強く反映した作品と見る。(貞任)の詞章と『源威集』との類似は興味深いが、深読みと思える考察も多く、また、世阿弥時代の作であるとの大前提に立って論を進めていることにも問題があろう。庇護者と作能との関係については天野文雄氏の一連の研究(『世阿弥がいた

場所」などがあるので、それらも参照すべきである。

このほか、平林一成「能〈哥占〉のドラマツルギー」(『演劇研究センター紀要』5)は〈歌占〉における「地獄の曲舞」の意義を考察する。従来解釈に問題があった『申楽談儀』「定まれる事」の「序をば序と舞、責めをば責めと」の一節を「責め」が足拍子であると解釈するところから出発し、『三道』の序破急五段論などを援用しながら、全体の曲構成およびクセの演技の推測をおこない、「責め」がおこなわれたであろう箇所を特定する。また野坂本の本文に従い〈歌占〉を読み直し、「地獄の曲舞」が独立性の高いものではなく、「シテ固有の経験上の同一性」にかかわるものであるとし、初期の〈百万〉には看取できない地獄廻りを見せる必然性を説明する。演技を想定する上で、詞章を具体・抽象と二分化し、後者を「責め(足拍子)」のみに引きつけている点は別見解も成り立つだろうが、世阿弥時代の演技を想定する上での一視点を提供している。岩城賢太郎「謡曲〈簾〉の「いくさ語り」——修羅能における「いくさ語り」の終息へ」(『国語国文』9月)は〈簾〉の語りの機能の分析と能作史への位置づけを目指した論。平家との直接的影響関係が想定しにくい箇所がある一方、〈簾〉の構成とは不適合な「去年」という文句がある(「クリ」「サシ」「クセ」は、『平家物語』にほぼそのまま依拠していると推測する。このような「いくさ語り」はシテの眼を通して「昔」を語る世阿弥の修羅能には見られない特徴であるとし、「いくさ語り」の機能が変化したと位置づける。「クリ」

の「去年」の語が全体と調和していないという指摘は面白いが、「いくさ語り」がシテの執心につながらないことから、当時の観客の「いくさ語り」への興味の変化を読み取り、それを「いくさ語りの終息」と位置づけられるかは再考の余地があると思われる。同氏の「修羅能」と「源氏物語」のことば―源氏寄合を手掛かりとして修羅能の展開を考える(『筑波大学平家部会論集』11。12月)も〈簾〉の関係論考。多くの源氏寄合や『源氏物語』梗概書と須磨を舞台とした修羅能を比較し、源氏寄合の多様な使用法を指摘する。また生田を舞台とする〈簾〉が「いくさ語り」において(敦盛)以上に源氏寄合を重用していることに注目し、応永期に源氏寄合を歓迎する風潮があったことを推測する。先行研究よりも広範な調査をおこない、〈知章〉の「越鳥南枝」の詞句の引用と源氏寄合の関係を明らかにするなど、傾聴すべき指摘も多い。ただしこれらの作詞法を当時の文化の在り方と結びつけるには、さらなる検討が必要ではないか。

室町後期以降の作品に関しては、小林健二「『平家物語』以後の文覚・六代譚―能とお伽草子―」(『海王宮』三弥井書店。10月)があり、慶應義塾大学図書館蔵のお伽草子「六代」論を中心としつつ、番外曲(六代)の考察も含んでいる。〈六代〉の劇的起伏に富む構成と、歌舞的要素の全くない性格を指摘し、『平家物語』と類似する文句を含みながらもこれに重要な役割を果たす母親を出さず、観音利生譚の要素を切り捨てている能独自の構想を示す。また、作者付、『舞芸六

輪」、文明十年の宇都宮・荒山神社での神事能の記録を紹介し、成立背景や室町期における受容を考察する。〔六代〕のような作品がどのような環境で作られたのかをさらに追究することは、今後の能楽研究の課題の一つであろう。斐文卿「作品研究(寒山)」(『演劇研究センター紀要』5)は、番外曲(寒山)に見える説法する寒山・拾得の姿は日本において独自に展開された説話を素材にし、説法の内容は法華経の直談系注釈書との関連が深いと言う。大枠としてはその通りなのかもしれないが、第六段「サシ」の詞章と「仏トハ何ヲ岩間ノ菩提只慈悲心ニシク物ハ無矣」の和歌との関係や、第七段「問答」「フリ地」の詞章と「法華経直談抄」の説く「妙法」との関係など、個別の論にはいまひとつ説得力が不足しているように思われる。

伊海孝充「徳川綱吉・家宣時代と切合能―「斬り組ミ」の確立をめぐる―」(『楽劇学』12。3月)は、演出研究と組み合わせた作品研究。綱吉・家宣時代の「切合能」(武士の合戦を描く能を総称する伊海氏の用語)復曲の状況を調査し、特に現行曲となっている(烏帽子折(忠信)(正尊)の詞章の変遷や演出資料を検討して、囃子事の「斬り組ミ」が家宣の時代に成立した可能性が高いこと、そこには喜多流が関与したであろうことを言う。

演出・技法研究では、森田都紀「江戸後期における笛方一噌流の地方伝承―仙台藩を例に―」(『藝能史研究』169)は、仙台藩桜井家に伝来した笛唱歌集二種に収められる(盤渉

楽)(「乱」の一噌流唱歌を、家元系の一噌流唱歌と精細に比較検討してその独自性を示すとともに、そうした特徴が、これら二種の唱歌集に書き留められた森田流・平岩流の唱歌とも共通することから、流儀差よりも地域の特徴が強く出ている可能性を指摘する。森田氏自身が述べておられるように、流儀の定義や、諸藩・地域による伝承体系など、問題は様々な方面に広がっていくと思われる。統考を望みたい。また、高桑いづみ「風流能と大ノリ謡」(『鏡仙』531。2月)は、地謡の統率者の役を負っていたワキが、風流能ではシテ並みに動くため、統率者がいなくても謡いやすい大ノリ謡が多く用いられるようになったのではないかと推定する。同じく短編ながら、『おもて』には天野文雄「能苑逍遙」の連載がされている。〔待謡〕をめぐる二、三の問題(85。6月)は、

「待謡」が本来は「間の謡」と呼ばれ、内容的にも間の段の末に属すると考えるべきであること、したがって夢幻能の後場は後ジテ登場から始まると見るべきと指摘する。〔檜垣〕の前場の舞台はなぜ岩戸観音なのか(86。9月)は、〔檜垣〕の前場である岩戸観音や靈巖寺の歴史を踏まえ、同曲のワキに靈巖寺を創建した東陵水璵のイメージを見る。〔神歌〕の誕生は明治初年のことなるべし(87。12月)は、翁の一部を素謡で演じる「神歌」が、明治一七年頃、梅若実の周辺で、素人の謡初場で生まれたと思われることを言う。

能の研究をより広い分野と結びつけていこうという試みは以前からおこなわれていたが、個々の論考においても、また

それを受け止める側の意識の面でも、少しずつ成果が現れているように思われる。『楽劇学』12号には、第12回大会でのシンポジウム「読む芸能」の報告が載る。能楽関係は、高桑いづみ「能を中心とした室町時代の読ミ物・覚エ書」で、勧進帳・願書・起請文の「三読ミ物」についての伝書記事をおさえた後、『平家正節』、『太平記』神田本に見える注記、『毛利家本 舞の本』の曲節風書き込み等に触れながら、人間に向かつて働きかける「語り」とは別に、神仏に向かつて「読みあげる」行為の表現として、能の「読ミ物」にも特殊なりズムや発声を取り入れられたのではないかと推測する。なお、同シンポジウムの報告として、他に山下宏明「第一二回楽劇学会大会に参加して」・佐藤道子「声明における「読む芸能」・今岡謙太郎「近世以降の「読む芸能」——講談を中心に」・児玉竜「「読む芸能」の拡がり——近世以降」がまとめられている。

モニカ・ペーテ「能翻訳の変化／この100年」（『外国人の能楽研究』）は、前半は能の翻訳がどう進化していくのか（きたのか）、個々の翻訳者が能のレトリックに馴れ理解を深めていくという面と、明治以来の能に関する研究の進展を踏まえた翻訳全体の時代的変遷とを合わせて考える。後半は具体的に（井筒）の後場から「あだなりと名にのみたてれ桜花」「真弓櫓弓年を経て」「筒井筒、筒井筒、井筒にかけしまろがたけ、おひにけらしな、おひにけるぞや」の三カ所を選んで英訳を比較し、謡曲（総合舞台芸術としての能の台本でもあ

る）を翻訳する場合、背景となる文学世界の扱い方や複雑なレトリックの処理など、どのような方法と効果があるかを検証する。能テキストの文学性を重視して翻訳する立場と、あくまでも舞台上での上演台本として、実際の能の様子を追うための情報を盛り込む翻訳の立場との違いなどもわかり興味深い。何よりも、海外での能楽研究がけっして無視できないレベルにあることを知らせてくれる論考でもあった。

池端ルクサンドラ・ヴァレンティナ「能における伝統の創造——井筒の場合」（『演劇研究センター紀要』5）は、文化人類学や歴史学の分野で有名な「伝統の創出（Invention of Tradition）」の理論を踏まえ、「能研究において能の伝統＝演技の型やテキストの意味が固定化されたものとして扱われている現状」に対して「パフォーマンスとしての能の流動性を浮き彫りに」しようとする。具体的には、観世寿夫と梅若六郎の（井筒）に関する言説や自身のおこなったインタビューなどに基づき、①能役者の舞台に影響を与えている役者自身の「演技観」、②能の研究における（井筒）の「発見」およびその解釈の変化と能役者の演技の変化との関わりについて考察する。観世寿夫・梅若六郎それぞれの（井筒）観はよく判り、また戦後の能楽研究がどのように（井筒）の価値を決めてきたかという点も、力のある演者の上演や発言が研究に影響を与えていくという指摘も興味深かったが、それらを「伝統の創出」という、イデオロギー的な意味合いの強い言葉でまとめってしまうことには違和感も残る。一方、たった二人の役者の

〈井筒〉一曲に関する論ではあるが、実際に現代の能上演の場でおこなわれていることを役者、観客、解説者まで含めて考察するこうしたスタイルの研究は、試行錯誤を繰り返しつつでも方法論を鍛え上げ、様々な形で進められるべきものと思う。伊藤貞紀「小町の「生」を描く―津村紀三子の新作能「文がら」―」(『演劇学論集』43。10月)もそういう論考の一つで、津村紀三子が新作能「文がら」を創作するに至った背景や環境について述べるとともに、彼女がこの能に籠めた思いを想定している。

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。小谷成子・野崎典子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻・解題五」(愛知県立大学文学部論集国文学科編)53。3月)は表題の書の翻刻の五回目で、巻三の前半一二曲を収める。「解題」が付されており、〈毘沙門連歌〉に変化が加えられていて、それが雲形本では「替之仕様」とされたとして『和泉流秘書』が雲形本より古いことを証する。堀川貴司「翻刻 魚説経・鳥説経」(『古典資料研究』11。6月)は、著者所蔵の『状詩帖』なる種々のテクストを載せる書に諸流(魚説経(魚説法)と天正本(鳥説経)それぞれの説経を並べる部分(原無題)を翻刻したもの。狂言以前の語り芸の姿を示す可能性を想定されるが、二つ並べることから見て、狂言から採ったとしていいだろう。ただし詞章は狂言台本と微妙に相違する。それも興味深いが、

この二つを並べて載せることがどういう意味を持つのか、二曲が並行して演じられていたのか、あるいは筆録者が影響関係を認めたのか、様々な想像をかきたてる。ともあれ天正本固有曲の詞章が別の書に書き留められていたことが貴重な発見である。

小林賢次「大蔵虎明本における狂言詞章の伝承と改訂」(『日本近代語研究』4。ひつじ書房。6月)は、虎明本の行間・上欄・曲末にある注記について数曲を取り上げ、論理的な整合性を重視した改訂案を示しているとし、それが後に受け入れられていった例と理論的に過ぎるとして廃された例があるとする。これは全面的な検討を要することである。

次に史的研究。小笠原恭子「狂言と物真似」(『能と狂言』3)は、大きく日本芸能史の中に狂言を位置付けようとするもので、単なる物真似芸にアド打つ者が出たところから狂言は進展した、アドがシテに対立する存在になっていったのが原初の形であったとし、示唆に富む。林和利「能・狂言をめぐる芸能史的雑考」(『東海能楽研究会十周年記念論集』も芸能史の中で能・狂言を考えるもので、「散楽の語源」など九項にわたって短章を並べる。

以下古い時代から。中世では永井猛「糺河原勧進猿楽の狂言」(『武蔵野文学』53。11月)は、寛正五年(一四六四)の糺河原勧進猿楽で上演された狂言について、慶安四年(一六五一)に行われたそれをめぐる幕府役人と役者たちとの応答を踏まえて検討する。記録が整理された一六世紀半ば頃の、そ

して江戸初期の狂言の状況がよくわかるのだが、寛正期の状況をどう捉えるかの問題が残る。

近世以降を扱うもの。山本晶子「馬瀬狂言保存会所蔵仙助能の番組二種について―明和・安政期の仙助座の動向をふまえて―」（年刊『芸能』11。4月）は、江戸後期の仙助能の番組二種を紹介し、他の資料とつきあわせて上演曲や役者について考察し、馬瀬狂言の芸に影響を与えたとする。宮本圭造「狂言師森川杜園伝」（『大阪学院大学国際学論集』16―1。6月）は、幕末から明治に生きた奈良人形の彫刻師森川杜園が、大蔵八右衛門派の狂言師として山田弥兵衛を名のり、維新後は大蔵本家に帰し、森川杜園の名で活動を続け、絵師を含めて三職を勤めたその生涯を、資料を博搜して精細に追う出演記録の一覧を付す。維新时期狂言史の、また奈良能楽史の重要な一齣である。

小林貴「狂言二流四派の系譜と芸風」（『国立能楽堂』257。1月）は、現在の狂言役者の系譜を簡潔に追い、四派（大蔵流の山本派・茂山派、和泉流の三宅派と名古屋派）の芸風とこれからの課題を示す。

作品研究は数曲にわたるものから。橋本朝生「狂言に見る男色」（『国文学解釈と鑑賞』3月）は特集「中世文学に描かれた性」の一編で、男色が扱われる狂言として（文荷・八尾・老武者・鶯・くも）をあげ、男色が笑いの対象とはなっていないことを問題にする。田崎未知「連歌と福神狂言」（『愛知淑徳大学国語国文』28。3月）は、連歌を詠むことに

よって物語が展開する福神狂言を取り上げて、その変遷を追うが、既知のことが多い。稲田秀雄「宗教劇と狂言」（『能と狂言』3）は、能楽学会世阿弥忌セミナーにおける「宗教劇研究の最前線」のシンポジウムのコメントで、狂言が「宗教劇」としての側面を持つのかを仏教との関わりから考察し、唱導の手段という意味での宗教劇とは言えないとする。

吉長千晶「狂言に見る女性像―女性が託されたもの―」（『筑紫語文』14。11月）は、狂言に登場する女性は「わわしい女」に代表されるが、これに狂言師は自分達の思いを託していたとする。女性と狂言師は同じように差別されていたからだというのだが、近年の女性史の成果から見えてだろうか。台本として「狂言記」を使い、「一般庶民向きであった」からとするが、それもどうか。三宅晶子「狂言における人間関係の流動性」（『国文学解釈と鑑賞』12月）は、特集「中世・近世の芸能と歌謡」の一編で、〈寝音曲〉から始めて、演者によって登場人物の個性を作り出す自由があることを指摘し、シテとアドの関係を室町期にさかのぼって考える。「流動的な人間関係の面白さを体験することの出来る狂言」が〈寝音曲〉の他一八曲例示されるが、なぜそうなのか、詳しく聞きたいところである。

以下、個別の作品研究。稲田秀雄「泣尼」の説法」（『同志社国文学』62。3月）は、〈泣尼〉の僧の説法について大蔵虎清本・虎明本、天理本、享保保教本それぞれの内容を出典等を含めて検討し、説法の言葉で尼を泣かせようとする和泉

103 研究展望(平成17年)

流演出に注目し、唱導説話を立体化したものとする。同「狂言『空腕』考」(『山口県立大学国際文化学部紀要』11。3月)は、〈空腕〉を類曲と比較し、太郎冠者がすっぱに太刀を取られるというモチーフの変形に、冠者が失敗をとりなすパターンを取り合わせて形成されたとする。行き届いた考察だが、類曲を含めた未分化の原形的なものを想定することもできよう。

内山弘「研究ノート…天正狂言本『鳥せんきやう』私注(下)」(『国語国文薩摩路』49。3月)は、前年に続き天正本〈鳥説経〉の後半の注釈。前掲「翻刻 魚説経・鳥説経」によって増補改訂されることになろう。佐藤陽子「狂言『神鳴』における笑いの考察」(『国文橋』31。3月)は、〈神鳴〉の笑いの仕掛けについて、大蔵流台本によってその変遷を見た上で、現行の茂山真一本によって詳しく分析する。狂言は人間を描くというのを前提とするが、それは笑いの分析から導くべきことであろう。

岩崎雅彦「狂言『弓矢太郎』と『鬼争』の構想」(『能楽研究』29)は、和泉流(弓矢太郎)が仏教の譬喩因縁譚によるものとし、二人が鬼になる趣向が近世演劇の手法を取り入れたことや背景としての天神譚について考察し、関連する鷺流〈鬼争〉、これらを元にした大蔵流〈鬼争ひ〉をあけて、新機軸を打ち出そうとする工夫があったとする。橋本朝生「牛座頭考―付野上文庫蔵『鷺流狂言秘伝書』解題―」(同上)は、新出の「鷺流狂言秘伝書」によって鷺流(牛座頭)を紹介し、

笹野堅旧蔵本中に残された現存しない宝暦名女川本の写真によって冒頭が一致することがわかることから、伝右衛門派の台本とした上で、天正本(駄賃座頭)を受け継ぐものではないかとする。田崎未知「狂言(ぬらぬら)考」(『東海能楽研究会十周年記念論集』)は、〈ぬらぬら〉(現行竹生嶋参)で太郎冠者のシャベリ語りの動物が立ち去り際に言う秀句を取り上げて、龍・蛙・くちなわが弁才天とかかわるとする。また龍に始まりくちなわに終る台本があることから全体を「竜頭蛇尾」の成語から着想したものとするが、証明は困難であろう。演出研究では、藤岡道子「狂言作物書 鷺流『追考』」(『聖母女学院短期大学研究紀要』34。3月)は、前年稿の「追考」。前年に紹介した「狂言作物書 鷺流」の作物図が「佐渡鷺流狂言資料」所収本と極めて近いものとし、両者の図を照応させて載せ、作物の名と使用する曲名を補足・訂正する。絵画に関する研究もここで取り上げるが、同「新出『狂言画集』の紹介と考察」(同上)は、著者の蔵するところとなった新出の『狂言画集』の全図を載せ、「狂言古図」の兄弟本とでも呼ぶべきものとする。同「北野天満宮と八坂神社の『釣狐』絵馬を読む」(京都観世会館『能』57。12月)は、獺師に主眼を置く二つの〈釣狐〉の絵馬が砲術家の命中祈願のためのものであったとする。

間狂言研究では、まず詞章の翻刻が二編。稲田秀雄「(翻刻)鷺流問集(二)」(『山口県立大学大学院論集』6。3月)は前年の続きで、春日庄作筆の伝右衛門派間狂言本の第二巻

一〇曲を収め、これで完結。藤岡道子「『間狂言会釈(あいきようげんあしらい)』の翻刻と解題」(『東海能楽研究会十周年記念論集』)は、江戸中期に高安流ワキ方の岡次郎右衛門家の一二代康文が書写した和泉流間狂言本の翻刻で、二冊に六二曲を収めるもの。ワキ方に必要な部分のみを抽出したところもあり、上演テキストであったという。西瀬英紀「間狂言を取り込んだ佐渡、久知八幡宮の花笠踊」(『能』568。9月)は、久知八幡宮の花笠踊に『賀茂』の替間(御田)がそのまま取り込まれていることを紹介する。

最後に国語学的研究。野村剛史「狂言の言語―その近世スタンダードとの関係」(『国文学解釈と教材の研究』7月)は、近世スタンダード(江戸期共通語)の淵源を狂言の言語に認め、狂言が「ミヤコ言葉の最も有力な伝達装置」であったとする。文法分野では、小林正行「狂言台本における副助詞ガナ」(『日本語研究』25。3月)は、狂言記を含む江戸期の諸流諸台本における副助詞「ガナ」(「かな」と表記されるものを含む)の使用実態を網羅的に見て、意味・用法の変遷を明らかにする。小林賢次「条件表現史にみる文法化の過程」(『日本語の研究』1―3。7月)は特集「日本語における文法化と機能語化」の一編で、狂言台本における様相を踏まえて条件表現の変遷を見る。安平鎬・福岡健伸「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系―存在型アスペクト形式の文法化の度合い―」(同上)も同特集の一編で、虎明本を主たる資料の一つとして、過去を表す形式「〜タ」と動詞基本

形が現在の状態を示す現象について、「〜テイル・〜テアル」の状態を表す形式としての成熟の度合いが低いためとし、そうした状況が現代韓国語と共通するとする。福岡「狂言のことは」と現代韓国語の意外な類似点」(『武蔵野文学』53)は、この論を特に狂言に即してわかりやすく展開する。

語彙の分野では、小野貴久「狂言記」における近世漢語「大分」―「あまた」との比較を通して―(『同大語彙研究』7。3月)は、狂言本に見られる漢語「大分」について大蔵流台本にはなく、狂言記の外編に一例ある他、続編・拾遺編に多く見られ、近世語を取り入れたものとする。狂言記を台本ではないかのように言うが、役者の書き留めた台本を元にするものではある。小林千草「戦国文書『大かうさまぐんき』と狂言『萩大名』―『大かうさまぐんき』の国語学的注釈から―」(『日本近代語研究』4)は、『大かうさまぐんき』の「武蔵の岩付の段」に注釈を加える中で、秀吉が「萩の枝」を詠んだ歌が『萩大名』を意識したものとするのだが、「当時の人々に狂言『萩大名』が広く知れわたっている」という前提を証する必要がある。蜂谷清人「狂言『三人長者』の諸台本に見る名ノリの指定表現の考察」(『日本語学の蓄積と展望』明治書院。5月)は、『三人長者』の長者たちの名ノリの文末表現を取り上げ、特に虎明本の「にておはします」のよつてきたところを考察する。『三人の長者』が虎明当時演じられていたかのように言われるが、それはあやしい。大倉浩「すっぱの唐名―狂言『さつくわ』のこと」(『武蔵野

文学」53は、(察化)の「さつくわ」が「目」の読みによるとする説を支持しつつ「さつくわ」だけを取り出して「盗人」の意味とするのは疑わしいとする。

朴花美「中世日本語の複合動詞逆引き索引」『大蔵虎明本狂言集』『エソボのハブラス』『三本対照捷解新語』を中心に「(専修国文」77。9月)は、表題の通り複合動詞の逆引き索引で、たとえば「くあがる」から虎明本の「おきあがる」「たちあがる」等の用例を知ることができる。

待遇表現の分野では、阿部八郎「狂言の待遇表現」(『山形大学紀要(人文科学)』15—4。2月)は、古典大系本『狂言集』によって、会話文・心話文・謡等の狂言独自の表現に分けて、それらの中での待遇表現の異同を見る。丁寧な考察であるが、独自の表現について次第・道行などと分け、一々大系の頭注を引くが、丁寧なようであり意味がない。謡で一括できよう。林弘子「天理図書館蔵『狂言六義』の二人称代名詞から見た待遇表現」(安田女子大学『国語国文論集』35。3月)は、天理本における「そなた」「そち」等の二人称代名詞を話し手と聞き手の人間関係、文脈中で共に用いられる表現から考察し、待遇表現体系を示し、虎明本より複雑なものとする。故に天理本の方が古い、とするのはどうか。

米田達郎「江戸時代中後期狂言詞章の丁寧表現について——マシテ御座ルを中心に——」(『国語国文』5月)は、享保保教本を中心に江戸中後期の狂言詞章に特徴的な丁寧語「マシテ御座ル」を取り上げてその成り立ちを探り、古典劇らしさを

醸し出す「新古語型」であるとする。歌舞伎からの影響を示唆し、狂言と歌舞伎の近さを言うのに虎明らが踊りに参加したことをあげるが、父虎清の誤り。小林賢次「狂言台本における謙讓語法——「申サル」とその周辺——」(『国語と国文学』11月)は、虎明本・天理本・虎寛本によつて「申サル」や「致サル」等の表現が、謙讓語から丁寧語に移すること、謙讓性の希薄化によつて尊敬語的用法が現れるとする。

【外国語による能研究】

◎単行本

Quinn, Shelly Fennio. *Developing Zeami: the Actor's Attunement in Practice*. Honolulu: University of Hawai'i Press. xi+479 pp.

世阿弥の能楽論を主題的に扱った大部の研究書。能の上演には様々な要因がその成否に関与するが、そうした中でいかに演者と観客との間に調和 (attunement) を達成するか。本書は、世阿弥がこの問題に対してどのように取り組み、どのような解決策を見出していったかという観点から、彼の能楽観の全体像とその展開ないし発展 (develop) の過程を辿る試みである。特に著者は、二曲三体論を世阿弥の思想の中核をなすものと見定め、それを軸に全体の論を構成している。

本書は三部構成で、第一部 (Zeami's Shift in Representational Styles) は、他ジャンル、他座との競争の中で世阿弥

が申楽の演技スタイルを変革し、「二曲三体」の演技システムを確立していった次第を考察する。「幽玄」や「かかり」といったものに対する世阿弥の考えは、時期により色合いとスタンスの微妙な変容を見せるが、著者によればその変容は彼の能楽観の根本に関わる重大なものであり、かつそれは、「二曲三体」の確立および成熟と密接な関係を持つものであったという。続く第二部 (Zeami's Literary Turn) では、「二曲三体」に基づく能作の理論と実践が、それぞれ『三道』および〈高砂〉の分析を通じて検討される。第三部 (The Actor's Attunement and *Nikyoku Santai*) では、「二曲三体」が世阿弥一流の教育体系の中でどのような機能を果たしているか、とりわけ、「無心」や「妙」といった高い次元での上演の成功を達成するために、それがいかに重要な役割を担っていたかが考察される。巻末には、『三道』と〈高砂〉の注付き英訳が付録されている。

これまで世阿弥の能楽論に特化した外国語の研究書は、翻訳を除けば、トーマス・ヘヤの著作 (Hare, Thomas, *Zeami's Style: The Noh Plays of Zeami Motokiyo*. Stanford University Press, 1986) などごく限られたものしかなかった。その意味で本書の刊行は、英語圏の能楽論研究の一つの画期をなすものと言えるだろう。本書のもとになっているのは一九八六年に刊行された著者の学位論文であるが、その後の研究の進展を踏まえて大幅に手が増えられており、巻末の参考文献表も頗る詳細である。

書評などを見る限り、本書はおおむね好評をもって迎えられているようだが、テキストの解釈にやや疑問が残るとする向きもある。世阿弥の能楽論全体を二曲三体論から捉え返そうとするのは著者の独自の視点であるが、世阿弥をどのような思想家として捉えるかという核心的な問題に関わることであり、それだけに、その視点とそれに基づく解釈の妥当性・有効性について、なお慎重な検討と今後のさらなる議論の展開が求められるところであろう。むしろそれは、日本人であるか外国人であるかを問わず、能楽論に関心を持つ全ての者に投げかけられた問いであると言えよう。

書評 Atkins, Paul S. *Journal of Japanese Studies* 33, no.1 (2007): 273-276./Coldiron, Margaret. *Asian Theatre Journal* 24, no. 1 (2007): 297-299./Dix, Monika. *Pacific Affairs* 78, no. 3 (2005): 494-495.

◎論文

Arcari, Jason. "Treasuring the Secret Within: Zeami's No Performer and Grotowski's Laboratory Theatre." 演劇研究 29: 1-16.

「実験劇場」(Laboratory Theatre)を主宰したことで知られるポーランドの現代劇作家、グロトフスキの演劇観と、世阿弥のそれとを比較する試み。著者によれば、世代間でどのように伝達・伝承を行なっていくかという問題 (transmission) についての考え方に、両者に共通するものが見出され

る。また、グロトフスキは演劇行為の根源にあるシャーマンのなもの(shamanism)に関心を寄せていたが、これも能と通じるものであるという。グロトフスキは当初から能を含めたアジアの演劇に興味を持っていたようで、世阿弥に言及した発言もある。引用された文章からは世阿弥の考え方との違いもかがわれ、異文化接触の問題として興味深い。

Bethe, Monica. "Translating Noh, an Historical Perspective," 西洋文学研究 25: 24-59.

これまでになされた謡曲の英訳を概観し、謡曲翻訳の問題点と展望を論じる。謡曲の翻訳は、時代とともに質の高い翻訳が生み出されるようになったが、とりわけ近年のものは、研究の進展、あるいは翻訳に対する考え方の成熟を受けて、一つ一つがそれぞれに工夫を凝らした特徴的なものが増えてきている、と著者は指摘する。単に進化したということではなく、どのような読者層や用途(教室用か、舞台観賞用か等)を想定するか、どの側面に重きを置くか(演者の動き、音楽の構造、言葉の典拠等)によって、翻訳のスタイル(注や補足の位置、ページのレイアウト等)が多様化してきているのである。後半では、(井筒)から数箇所を取り上げて各訳の特徴を比較し、言語の差異(文法構造の相違等)が翻訳に及ぼす影響について言及する。なお、ほぼ同内容の和文論文が、『外国人の能楽研究』に掲載されている。英文に比べる内容は簡略だが、翻訳書の比較が画像資料として付されて

いる。

Coldiron, Margaret. "Lions, Witches, and Happy Old Men: Some Parallels between Balinese and Japanese Ritual Masks." *Asian Theatre Journal* 22, no. 2: 227-248.

能とバリ島の仮面舞踊劇の面を比較し、その類似性を明らかにする。タイトルにあるように三種の面を比較の対象とし、能で取り上げられるのは、獅子、般若、翁系統の面である。視覚的に形態が似ているというだけではなく、それぞれの面の持つ性格や、使われ方、祭礼等で用いられる際の機能などにも、類似があるとする。さらに、考古学や神経生物学などの最近の知見を援用しつつ、能とバリの舞踊は深いところで通じているのではないかと、両者の底には、何か時代や地域を越えて通じる普遍なるものが潜んでいるのではないかと、というのが本論の眼目のようである。著者には、前年に出された同じテーマの著作があり、その延長上にある仕事であろう。

Fukushima, Yoshiko. "Masks, Interface of Past and Future: Nomura Mannojo's *Sringgaku*." *Asian Theatre Journal* 22, no. 2: 249-267.

二〇〇四年に早逝した狂言役者、野村万之丞の活動を回顧する論。万之丞は、古典の枠におさまらない幅広い領域にまたがる活動を展開したが、著者は「新伎楽」をそれらの活動の一つの集大成として見定め、その紹介と検討を通して、彼

の活動の背景にあった意図、各地の役者や研究者との交流の諸相、そして彼の業績の意義を考察する。

Inoue, Shinya. "A Semiotic Approach to Noh Aesthetics." 星稜論苑 34: 49-54.

記号論の考え方を導入して、アリストテレス(に代表される西洋演劇)と世阿弥(に代表される日本の演劇)の考え方を比較し、両者の志向の違いを明らかにしようとする試み。前掲の Arcati 氏、Coldiron 氏の論もそうであったが、古今・東西の演劇や演劇観を比較するという視点は近年ますますさかんになってきている。今後この方向の議論は活発になっていくだろうが、その方法をとることの是非、および、その際の議論の方向性・枠組み設定の可否の問題を含めて、東西どちらの立場から発言するにせよ、より慎重かつ委曲を尽くした検討が求められるであろう。

Lim, Beng Choo. "Performing *Furyū Nô*: The Theatre of *Konparu Zenzô*." *Asian Theatre Journal* 22, no. 1: 33-51.

禅風の能作の特徴を、数曲の例曲(初雪・生田敦盛・黒川・家持)の分析を通して、とりわけ前代(世阿弥や禅竹)の能との対比の上で、明らかにすることを目指す。著者が禅風の能の特徴と見るのは、種々雑多な素材の活用、夢幻能的ではない単線的な時間の流れ、視覚的な効果の強調、場面の複数化や多様な人物配置による筋の複雑化、などである。著者

は、これらは禅風が同時代の潮流を受けつつ行なった意識的な改革の産物であるとし、そのような変革を齎した時代背景についても言及する。また、定訳がなかった「風流能」を「elegant spectacular nô」と訳してはどうかという提案もなっている。

Sakaba, Junko. "Between Noh and Kyogen: The Heart That Dances and the Heart That Does Not Dance." (Part 1/2) 神奈川工科大学研究報告A人文社会科学編28 (2004): 25-34/29 (2005): 13-25.

能や狂言の登場人物(といっても、ここで検討されるのはほとんどが能の場合である)はなぜ舞を舞うのか。著者は、能の舞には、劇中舞のように場面が要求するものから、シテの心情を表すものとしての抽象的な舞まで、様々な段階があるとした上で、恨みや悲しみなどの感情があまりに強いときにはむしろ舞は成立しにくく、感情がいわば昇華されたときにこそ舞は舞として成り立つ傾向がある、とする。例えば「葵上」の六条御息所が舞を舞わないのは、彼女が「舞う心」ではなく「舞わぬ心」の人物だからである。能における舞の意義を、曲の内容、とりわけ登場人物の心情との関係で考察する論である。

Salz, Jonah. "Subtitle subtleties: Translating Noh and Kyogen in New York." 国際文化研究 9: 43-54.

著者は、二〇〇四年三月にニューヨークで行なわれた能・狂言の上演に字幕を付した経験を持つ。その経験をもとに、能と狂言の翻訳について論じる論である。能は劇の進行が遅いため、二・三行で途切れ途切れに表示しなければならぬ字幕では観客の注意を引き続けるのが難しいこと、逆に、断片的に表示せざるを得ない字幕においては、和歌や連歌のように、後へ後へと続いていく言葉の流れを、あえて中断することでは先の展開を期待させる効果があること、狂言では動きとセリフ(言葉)の内容が連動しているため、笑いのポイントと動きのポイントを合わせることが難しいことなど、書物を前提にしたこれまでの翻訳論とは一風変わった論点が指摘されている。

Serper, Zvika. "Japanese Noh and Kyogen Plays: Staging Dichotomy." *Comparative Drama* 39, no. 3: 307-360.

能と狂言は、相互に対立する要素を含み持ちつつ、その対立(dichotomy)の両極がお互いを支え合う関係を形成することで、両者の間には調和が達成されている。そしてそのようないわば調和的な対立関係は、能や狂言の様々なレベルに見出すことができる。以上の見解のもとに、著者は能と狂言の数ある演目を、基本的には能の五番立ての枠組みの中に配列し、その枠組みの中で、曲どうしの間、あるいは能と狂言の間で、どのような対立が成立するかを論じていく。(様々な演目について対立という軸を立てるとこのように見えてく

る)ということと、(様々な演目は対立を軸にして作られている)ということとは別のことであり、本来分けて論じるべきであろうが、本論においてそのあたりがどのような見通しになっているのか、いまひとつはつきりしない。

Zollinger, Adam. "Issues in Creating a Digital Inventory of Pre-modern Noh Masks." 相模英米文学 23: 15-26.

能面研究に、デジタルインベントリー(目録)を導入することを提案する論。多くの能面が各地に散在していること、多くはブライベート・コレクションで、散発的に展示がなされることがあるものの、現存能面の全体像をシステムティックに俯瞰する方法がないことなど、現在の能面研究の問題点を指摘。その上で、各地に所蔵されている能面の調査を行なうべきこと、そこで得られたデータをもとに、デジタル目録を作成すべきことを主張する。著者はファイル・メーカーを使って独自に目録作成を進めているようで、目録のサンプルが資料として提示されているが、進捗状況や公開の予定の有無等については不明である。